

## 目次

第3回都市計画研究会 都市計画シンポジウム・	・中国地方における生活交通確保の事例（森山昌幸氏）……………	1
第4回都市計画研究会	・『多地域居住』の可能性を探る（熊野稔氏、他）……………	3
21年度第1回都市計画サロン ひろしま風景づくりフォーラム・ フォトコンテスト	・NYにおける最近の都市開発の動向9.11以降（トム・アンガッティ氏）……………	6
ホットコーナー	……………	9
会員紹介	・シリア・ヨルダンの旅行で見た古代隊商都市の建設（杉恵頼寧氏）……………	10
今後の活動計画	・樋口忠彦氏・岐美 宗氏……………	14
編集後記	……………	15
	……………	16

## 第3回 都市計画研究会(2008年度)

テーマ：中国地方における生活交通確保の事例

日時：平成21年1月24日(土) 14:00~16:00

場所：コンフォートホテル広島

講演者：(株)バイタルリード 代表取締役 森山昌幸氏

参加者：20名

企画・研究委員会では「生活交通とまちづくり」を今年度のテーマとして、都市計画研究会を開催している。第3回の研究会は、平成21年1月24日、広島市内のホテルにて、(株)バイタルリード代表取締役 森山昌幸氏を招聘して中国地方における生活交通確保の事例に関して講演していただいた。学識経験者、行政関係者、コンサルタントなどの約20名の会員が熱心に聴講し、意見交換を行った。



写真：(株)バイタルリード代表取締役 森山昌幸氏

### 講演概要

講演においてはパワーポイントを用いた要点をタイトル化した以下に示す流れで報告がなされました。

#### ①路線バスをめぐる状況

・平成14年のバス需給調整規制の緩和(参入撤退の自由化)により、産業としての路線バス事業から社会基盤としての位置づけに変わってきた。

・道路運送法は平成18年の改正により、事業者管理の法律から交通政策のための法律に変わってきた。

・平成19年10月の地域公共交通活性化・再生法の施行により、輸送の安全確保は国が担い、地域交通政策は自治体が担うという役割分担が明確化され自治体の役割が重要なものとなった。

#### ②公共交通のプレーヤーの変化

従来のサービス提供者はバス事業者、タクシー事業者であったが、今後はこれらに加え、行政、住民、NPOその他がサービス提供者となり、運行補助も単純な路線単位の赤字補填から、地域の生活交通確保全体に対する経費負担(日本版LTP)へと変化しようとしている。

#### ③バス事業者

厳しい経営環境で新たな展開ができない体質にあり、かつては交通事業者自らが需要創出(百貨店、テーマパーク、住宅団地等)をしていたが、今後は総合的な生活支援型サービスの提供を求められている。

#### ④タクシー事業者

厳しい経営環境にあり、介護タクシー、乗合バス運行、デマンド型乗合タクシー、観光タクシー、貸切事業など新たな展開を求められている。

#### ⑤行政

議会やトップからは二つの要求(経費節減、全ての住民の移動手段確保)があり、地域の生活交通確保に対するスタンスの違いがある。

- ・広島市一自治体は個別地区の公共交通に関与しない。
- ・山口市・北九州市一やる気のある地区をバックアップ。
- ・多くの自治体一全ての住民の生活交通確保を視野に入れており運行サービスは千差万別である。
- ・地域住民と協働で運行計画を作成する動きにあり、「山口市のコミュニティタクシー」、「北九州市のおでかけ交通」がある。

## ⑥新しいプレーヤー(住民など)

斜面上に開発された住宅団地(高齢化が一気に進行、自動車に依存しすぎていた生活スタイル、突然移動困難となる)で、「矢口おもいやりタクシー」のように自分達の移動手段は自分達で確保するという新しいプレーヤーが現れている。

## ⑦バスサービスと需要の関係

- ・バスサービス向上によって外出頻度が増加する。
- ・バス料金の利用限界水準として、300 円を境に需要は半分未満となる。
- ・バス停までの距離の利用限界水準として 400mを境に需要は半分未満となる。
- ・バス運行本数の利用限界水準として 1 日 2 往復を境に需要は半分未満となる。
- ・ベルギーの成人女性を対象とした研究では公共交通機関(バス停・鉄道駅等)へのアクセスが良い人ほど良く歩いており介護予防の効果があるとの報告がある。

## ⑧デマンド型乗合タクシー(DRT)

広島県安芸太田町「あなたく」の事例紹介がなされた。

- ・受付はタクシー受付と兼務でエクセルの予約システム。
- ・電話で予約し、運賃は 1 回 200 円、月曜～土曜に運行。
- ・年 4 回の町と運行委託業者の定期会議により課題改善。

## ⑨拠点施設への移動(三次市岡三淵地区)

- ・島根県中山間地域研究センターによる実験(無料)
- ・月に 1 回、自宅から三次市内中心部まで運行、市内の移動(医院→ホームセンター→SC 等)も担う。
- ・バスツアー的な楽しみがあり、非常に好評である。

## ⑩新しい移動手段の提案

旅行業法にもとづく観光あいのりタクシー(須佐神社物語)の紹介。インターネットでマッチング行われ遠方からの利用も多く好評である。

## ⑪交通結節点整備

中山間地域の公共交通は運行本数が少なく、交通結節点での待ち時間が長くなり、交通結節点での快適性が求められる。必要な施設や設備としては、生活利便性向上付加施設(キャッシュコーナー、処方箋薬局、買物場所等)、待合所環境向上(冷暖房、畳の休憩場所、食堂・喫茶、自販機、テレビ、簡易図書館、バスロケ等)、先進的付加設備(病院予約システム、情報端末、病院併設等)が挙げられる。

## ⑫まとめ

### 1) 公共交通計画の留意事項

- ・地域の状況によって課題が異なり当然解決策も異なる。
- ・合併時に先送りした各種課題とバス運行の見直しが密接に関連する。(バスサービスの不均衡、教育施設の統廃合等)

### 2) 地域バス運行の PDCA サイクル

バス運行計画から改善策の立案までの Plan(計画)⇒Do(運行)⇒Check(見直し)⇒Action(改善)の地域バス運行の PDCA サイクルが必要である。

### 3) 継続的な運行見直し

- ・短期間で各種環境(居住地側・目的地側)が変わることへ

の対応

- ・バス運行に唯一の解はないため、常に見直しを行う必要がある。
- ・運行計画策定時がスタートで常に見直しを行うことが不可欠である。

## ■意見交換

講演後の参加者との意見交換では以下に示すような活発な議論がなされました。

- ・公共交通に関する規制緩和から 10 年たっているが、何のメリットがあったのかを考察して行く必要がある。また補助金についても効果的なあり方について見直す必要があると思われる。
- ・広島市佐伯区の方からの報告で、住民アンケートにもとづき地域住民主体で料金を取って貸切バス運行を計画している。旧バス停での駐停車禁止や道路運送法の制約など問題を抱えているがバス運行実験に取り組みたい。
- ・山陽小野田市のスパなどでは独自に無償で買物バスの運行を実施している例もあり参考にすべきである。
- ・需要があるディマンドバス運行はよいが、中山間の谷地では低密度の広い範囲を時間をかけて運行してゆく必要があり、地域の足を確保と需要の関係を考えて行く必要がある。
- ・バス運行に関しては利用者の料金収入のみでなく、広告収入も考慮して行くことも必要ではないか。
- ・イギリスのポストバスのように、人を配送後のトラックに乗せることも検討すべきである。島根県での運送業者でのヒアリングでは取り組みたいとする企業もある。
- ・バス運行本数のシビルミニマムは 1 日 3 便との報告があった。
- ・ディマンドバスなどの利用方法に関しては、失敗例も入れた寸劇なども有効な周知手段である。
- ・ディマンドバス運行は定員オーバーの場合はお断りとなるが、利用者が一人しかいないような場合の運行は便数集約などの課題がある。
- ・本日の広島市佐伯区の事例は地域公共交通会議に取り上げ協議し改善策を検討して行くことが重要である。



写真：会場内での意見交換の様子

(文責 安永洋一郎)

## ■都市計画シンポジウム・第 4 回都市計画研究会

テーマ：「『多地域居住』の可能性を探る」

日時：平成 21 年 1 月 31 日(土) 14:00~17:00

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ

プログラム：

1. 第 1 部：基調講演

徳山工業高等専門学校 准教授 熊野稔氏

2. 第 2 部：パネルディスカッション

報告 1 小田博之氏 (NPO 法人ひろしまね 副理事長)

報告 2 小笠原美穂子氏 (邑南町定住企画課商工観光室)

報告 3 大知一也氏 (安芸太田町空谷を考える会相談役)

報告 4 竹田隆一氏 (コミュニティよしわ事務局)

コーディネーター

宮本茂氏 ((社) 中国地方総合研究センター)

主催：日本都市計画学会中国四国支部

共催：日本建築学会中国支部、都市住宅学会中国・四国支部

参加者：80 名

過疎化、高齢化が他地域以上に進展している中国四国地方において、特に、中山間地域の住資源を有効活用した交流・定住を進めていくことは極めて重要であり、かつ最近「定住」にこだわらないさまざまな、「多地域居住」の取り組みが実績を上げつつあるため、こうした動向について多様な論点を整理しつつ今後の検討のきっかけとなる研究会として企画された。参加者は計 80 名(定員 100 名)と、多数の参加者があり関心の高さを感じ、かつ活発な議論がなされて盛況であった。



■会場の様子

### 1. 第 1 部：基調講演「近年の二地域居住への期待と、クラインガルテンの評価と可能性」(熊野稔氏)

最初に、二地域居住の定義についてである。「都市住民が年間で 1 ヶ月以上の中長期、あるいは定期的・反復的に、農山漁



■熊野稔氏

村等の同一地域に滞在すること」(国土交通省)であり、取り上げられてきた背景としては、①自然豊かなところで都市生活のストレスをリフレッシュしようとする都市住民の根強いニーズがあること、②2007 年から始まる「団塊の世代」の大量定年(約 700 万人)は確実であり、定年帰農など潜在的な需要は十分大きいこと、③インターネットの急速な普及による情報提供環境の整備と農山村を支援する様々な NPO が出現していること、④大幅な人口減少や急速な少子高齢化の進行による集落の崩壊など、農山漁村等の地域コミュニティ内での危機感の高まりへの積極的な対応が求められている。

また、二地域居住の意義として、①都市住民は、「このころの時代」の多様なライフスタイルを農山漁村で創造することが可能となり、ハレの場としての農村の役割があること、②都市生活では難しかったプライベートな書斎やアトリエ、音楽演奏室等の所有が実現できること、③農山漁村の側でも、一定規模の消費需要、住宅需要等を創出、地域コミュニティ活動や地域文化活動等の新たな担い手の増加になること、④様々なケア等の生活面や震災等の災害に対する疎開などセーフティ・ネット(安全網)の役割が可能となること、⑤さらに長期的(2030 年頃)には、都市住民が、都会等での就業を維持しつつ、生活時間のかなりの部分を農山漁村等でも過ごすという新しいライフスタイルが確立してくるとの予測、仮定がある。

また、本格的な人口減少・少子高齢化時代を迎え、①維持・存続が危ぶまれる集落等が全国で拡大(過去 7 年で約 190 集落が消滅)、②生活への不安、貴重な文化・伝統・風土等の喪失の恐れ、③国土の荒廃、災害脆弱性の拡大等、④地域への誇り・愛着を共有する多様な主体を地域づくりの担い手として位置づけ、行政と協働し、地域のニーズに応じた社会サービスの提供等を行う「新たな公」の活動により、地域活性化や国土管理上の諸課題への対応を図るなど、二地域居住による農山村振興を進める必要がある。

二地域居住を促進する具体的な外部人材の導入の過程については、定住を最終目的とすると、①情報入手→プラン→②体験→交流→滞在→③交流居住→二地域居住→④定住のステージやフローが考えられること(直接の定住や交流居住等が最終目的となる場合もある。)、田舎志向の都市住民は増加傾向にあり、交流居住や二地域居住により、都市住民の生きがいを促進し、農山漁村の活力増進と自立を促進させ、ひいては定住人口の増加につなげるプロセスが国あげて推奨され、重視されている。

二地域居住の具体的な事例として、川根地区お好み住宅(若者定住促進住宅)(広島県安芸高田市)、道の駅頓原情報交流館(島根県飯南町)、農家民泊(安心院グリーンツーリズム研究会が商標登録)(大分県宇佐市)、島根県邑南町グリーンツーリズム、別荘団地等(島根県邑南町)があり、そのグリーンツーリズムの効果として、主催者・参加者相互の「幸せ・元気効果」、「別離の涙現象」、「心身の健康回復効果」、「教育・寝効果」等が期待できる。

さらに、その他の事例として、森の巣箱(高知県津野町)、板井原集落(鳥取県智頭町)、俵山温泉(山口県長門市)、伊座利校「海の学校」(徳島県美波町)、兵庫県坊勢島(家島諸島)、メゾンコスモ(村営若者定住促進住宅)(長野県下條村)が紹介された。



■川根地区お好み住宅



■道の駅『頓原』情報交流館  
熊野氏設計

(講演資料より)

その後、全国での二地域居住関連のモデル事業の説明が行われ、二地域居住を促進する事業制度として、○新たな公によるコミュニティ創生支援モデル事業；国土交通、○地域の発意に基づく多様な主体の協働活動をモデル的に実施、○西神楽地域における冬期集住・二地域居住環境推進モデル事業、○遊休・荒廃農地の活用による定住・二地域居住促進事業、○二地域居住・定住希望者のニーズを踏まえた古民家活用などによる受け入れ環境整備事業、○地域力発揮による二地域居住推進モデル構築事業、○農山漁村に人材派遣「田舎で働き隊！」(農水省事業)等の事業が紹介された。



■ガルテンヴィラ大島



■志都の里クラインガルテン

(講演資料より)

最後に、中国地方のクラインガルテンの事例について、ガルテンヴィラ大島(山口県周防大島町)や志都の里クラインガルテン(島根県飯南町)について説明が行われた。

今後の方向性として、人材の育成・確保が必要であり、まちづくり・村おこしに成功している地域に共通な図式には、必ずといっていいほど人望の厚い有能なリーダーがおり、地域の資源を活用して事業実施し、交流人口を集めており、また、地域ブランドとして知名度を有してくるようになることと後継者問題の解決にも有力な一助となることが指摘された。

さらに、リーダー等の人材は地元に限らず外部からの人材やエネルギーにより活性化している事例も多く、集落が開かれてよそ者をひきつけ、受け入れる体質も重要となってくる。行政や地元集落は、いかに有能なリーダーや取り巻きの人材を育成していくことが、地元の持続的発展にとって必要であるかということ再認識し、取り組んでいく

ことの必要性が指摘された。

最後に、農山漁村活性化の展望と今後の方向性として、ますます増加する集落の高齢少子化と小規模化への対策が必要であること、生活交通、情報基盤、医療福祉、買い物機能の基盤強化に加え、外部からの交流人口をいかに増やして活性化し、定住や持続性に結び付けていくかが求められることが、指摘された。

## 2. 第2部：パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、中山間地域で交流・定住の取組みに関わるさまざまな立場から取組みの報告をしていただき、活動の問題点や今後の展開等について議論を行った。

### (1) 報告1「都市住民の受け入れ事業を実施・提供する団体の立場から」小田博之氏

「ひろしまね」は広島と島根で地域活動をするために2004年に結成したNPO法人で、江の川流域を中心に活動し、事務所は島根県邑南町にある。古民家を改修して事務所として使っている。



■小田博之氏

まず、自然回帰倶楽部を設立し、1口50万円の出資で家のオーナーになれる仕組みを考えた。この場所を使って、広島の団体と一緒に年々3回程度交流活動(竹灯籠づくりなど)をしている。大草地区では、家を改修し民泊・体験活動をしている。地区内の高齢者世帯で23.8haの水田を所有しているが、将来は大半が耕作放棄地になってしまう可能性がある。その活用についても今後考えていきたい。現在は、耕作放棄地を利用して和牛放牧による粗放的耕作放棄地管理実験を行っており、安上がりで里山管理ができる実験をしている。将来は、地域出身者への和牛オーナー制度を考えている。

今、農山村でも、都市側でも危機がある。お互い危機がある地域と一緒に手を組むことでいろいろな効果があるのでないか。その中間支援組織としてNPOや市民団体が一緒にやっていくことが必要である。

都市農村相互訪問による可能性として、①大災害時に即受入可能な疎開協定(古民家活用)、②少々高くても安心安全な食料供給協定(不耕作地の活用)、③自給自足的生活空間の確保・楽園づくりを楽しむ、④持続的な体験学習による共生文化、生きる知恵の伝承、が指摘できる。

## (2) 報告 2 「都市住民の受け入れ事業を展開する自治体の立場から」小笠原美穂子氏

島根県では田舎ツーリズム推進事業を主要施策として打ち出している。邑南町でも田舎ツーリズム推進事業を立ち上げ、現在は 94 名の会員がいる。邑南町の活動では農家民泊と農家民宿が中心である。ファンクラブを対象に年間 6 回ぐらいのツアーを開催している。今までは通過型の観光が主であったが、滞在型で少しでも長くいてもらうことを考えている。



■小笠原美穂子氏

田舎ツーリズムの柱は 4 つある。①四季折々の景観を織り込んだ体験、②地元の食材を使った食へのこだわり、③レベルの高い郷土芸能の伝承、④本物の提供(名人の登場・地域の良さ)である。最終的には、「地域資源や人材を生かしたありのままのおもてなし」「受け入れ側は、無理をしない、楽しいと思えるおもてなし」を提供している。

四季によっていろいろな体験(春の田植え体験や初夏の里山トレッキングなど)ができる。これらの体験には地元の人に名人として登場してもらっている。食へのこだわりとして、地産地消による「農業の大切さ」と「経済効果」、食育を通じた「食の安全・安心」と「命をいただく」ことを学ぶことにつながる。レベルの高い郷土芸能の伝承のなかで、一番人気があるのは神楽体験であり、参加型の体験を行っている。

若者インターン事業では、夏に 4 人の学生を受け入れた。学生などの若い力が町を元気にし、地域のおばあちゃんも元気になっている。学生が邑南町の親善大使となり、ブログを開設し、情報発信を行っている。

これからの課題として、①受け入れ農家の拡大と組織の自立、②邑智郡田舎体験連携協議会の設立による子ども農山村交流プロジェクトの受入体制づくり、③グリーンツーリズムに感心のある大学生の受入があり、交流人口の増加と定住につなげていきたい。

## (3) 報告 3 「過疎高齢化が進行する集落を守る住民の立場から」大知一也氏

もともと、集会所をつかってほしいという要望を町に出したところ、空谷にある 2 つの地域農業集団を 1 つにすれば拠点施設をつくってもらえるということか



■大知一也氏

ら、地域農業集団の組合長になり、集会所や農産物の加工施設などをつくってもらった。空谷の地域農業集団では、「椎茸グループ」、「農産物加工グループ」、「杜仲(とちゅう)生産グループ」などに分かれて、それぞれグループで運営していた。そのうち、高齢化により地域の気力がなくなってきたことから、懇談会をもつようになり、17,8 年前に「空谷を考える会」を結成した。

会で行ったこととして、地域外との交流がある。子どもたち 30~50 人が参加し、米づくり体験などを行った。

一昨年には中国新聞にも空谷の概要が紹介され、国の集落調査などの行われるようになった。「空谷を考える会」を立ち上げた当初にやっていただくとよかった。

地域には棚田の歴史や石垣の文化があり、それらが山に帰ってしまうのは忍びない。地域が山にならないように、地元にいる人が頑張っているし、さらに地元を出ている子ども(息子)たちがたまに帰ってきて農業を手伝うことで地域が維持されている。

## (4) 報告 4 「新住民・二地域住民を受け入れる地域コミュニティの立場から」竹田隆一氏

すばらしい自然の裏返しにいろいろな問題もある。吉和地域は自然が豊かな地域であり、地域の特徴が色濃く残っている。豊かな自然が残っているということは



■竹田隆一氏

金持ちが突出して出てこなかった、営利目的で森林を伐採してこなかったということであり、非常に貧しい地域であった。豊かな自然が残っている裏側に地域の貧しさが見え隠れする。

交流や都市のニーズがあり、それを受け止める地域にもいろいろなニーズがある。住民が地域のもっている特徴を知らないといけない。自分たちの特徴は何かを考えた上で、都市農山村交流をしようという動きを始めたところである。これまでに交流促進のなかで、お試し暮らしや空家バンクなどにも取り組んだが、ほとんど成果を見せていない。それは、都市のニーズと地元のニーズが合致していないのではないかと思う。

別荘も約 700 件あるが地域との交流がまったくない。別荘側も住民側もまったく興味がない。自分たちでなんとかしたいといけないということで、昨年度、やっとコミュニティを立ち上げた。地域としてどういう考えを持っているのか、別荘の人とともに、それぞれの思いを一緒に考えている。吉和の場合、山村交流の意識がなく独特の精神構造の経緯をもっている。本当に都市住民が求めているものは何か、それが地域にあるのかということ問い直しつつあるのが吉和の状況である。

## (5) 意見交換

意見交換では、教育者、団体や自治体、受け入れ側の住民など、様々な立場から意見が出された。

「多地域居住」の今後の方向性については、○活動の安全性が重要であること、○グリーンツーリズムの国際化への発展、○無理をしない交流が重要であること、○リピーターの重要性などがあげられ、受け入れ側としては、○都市住民も地域住民の役割を果たし仲間づくりを行うこと重要であるなどの意見が出された。

また、今後、改善、工夫してほしい点については、○都市と農村が一体となった取組みの必要性、○地域の「人」を大事にしてその地域でしかないことをやること、○中間支援組織が独立してやっていける仕組みづくりの必要性、○農業法人などを設立しようとしたときの国の援助、○交流が進んでいる時だからこそ地域が日本を取り戻し、地域での生活を広げていくことが重要であること、などがあげられた。



■意見交換の様子

## (6) まとめ (宮本茂氏)

人と人のふれあいが非常に大事なこと、また、多地域居住といっても地域づくりといった側面が強く、各主体間のつなぎ方が大事ではないかと思う。こうした点を含めて、今後議論を深めていければよいと思う。

(文責 石村 壽浩)

## ■平成21年度 第1回 都市計画サロン ■

テーマ「ニューヨークにおける最近の都市開発の動向9.11以降」

講師：トム・アンガッティ氏 (ニューヨーク市立大学)

日時：平成21年4月29日(金) 19:00~21:00

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ 研修室B  
広島市中区袋町6番36号

主催：日本都市計画学会 中国四国支部

参加人数：23名



トム・アンガッティ氏は、ルイジアナ州ブルックリンに居住するニューヨーク市立大学ハンター校の教授だ。

ニューヨークの都市計画局に勤めていた経歴を持つ。

「NY for Sale」という本を出している。

都市計画において、「立ち退かなければならないという闘争」について研究している。

都市は、都市計画などで大規模な区画整理などで構造を変えられるほか、社会環境や経済条件などで、姿を変える。

税の滞納による家の放棄や、準公共である大学や病院の拡張など。

ニュージャージーのニューヨークは特に、セントラルパークから見る高層ビルでわかるとおり、不動産産業の力強い影響を受けている。

ニューヨークの観光局は、ニューヨーク&カンパニーと言われるほど、不動産の営業について、力を入れている。

ニューヨークの大都市圏は1800万人で、3つの市に分かれ、2000を超える自治体で運営されている。ニューヨーク市自体は、地方自治体はなく、分断していない。7種の交通がある。ニューヨークは金融に特化された首都といえるだろう。

しかし、コミュニティによって、都市の環境はがらっと両極端に変わる。

たとえば、アッパーイーストサイドは、世界で最も金持ちが住む場所で、ロウワーイーストサイドは、世界で最も貧乏な人達が住む場所だ。ニューヨークの中でも百万人が食糧がなく、4万人がホームレスとなっている。中産階級は郊外に住んでいる。

不動産の動きが、ニューヨーク市内のコミュニティの落差を生み出している。ウォールストリートは、ニューヨーク市

を不動産都市にした。ニューヨークは、土地利用が弱く、ゾーニングも弱い。新自由主義の都市といえる。そのため、人種と階級で細かく分割され、結果として、細分化されたコミュニティが出来上がっている。

不動産プランニングは、商業的な機能だけをもたすため、裁判が後を絶たない。ワールドトレードセンターの計画も、最初は商業的な発展を目指すことにより、テロへ立ち向かうのだという根拠で商業的な高層ビルが立ち並ぶ計画だったが、テロの被害者の家族達による裁判で、ようやくワールドトレードセンター跡地を足跡のようにビルの跡を示した公園を申し訳程度に設けただけである。ワールドトレードセンターをクイーンズに設けようとしたが、近隣の反対に合って頓挫している。

また、ジェッツのメジャーサッカー場をミッド・イースト地区に設けようとしたが、近隣に反対されている。

コミュニティプランニングという考え方は、抵抗から始まったといえる。ここで言えるのは、ニューヨークのプランニングは、世界の不動産だけではなく、コミュニティにも支配されている。新自由主義な考え方だけではなく、参加型民主主義だ。

ニューヨークのコミュニティプランは、大小合わせて70程度ある。ブロック単位の計画から、15万人の人口にかかわるものもある。10が、ニューヨーク市の審議会を経て採択されている。いずれも、市政府の支援なしで作られている。

#### ・クーパー・スクエア計画

1959年に、コミュニティ活動家フランシス・ゴルディン(女性)が「専門家は出て行け」を合言葉に都市更新計画に反対するところから始まった。ウォルター・サービット(都市計画家)がそれに協力し、都市更新を抑えた計画を提案している。

#### ・ザ・メルローズ・コモンズ計画

1993年に、ヨランダ・ガルシア(女性)により、都市更新計画に反対し、住民や企業が立ち退かなくてもよい考え方で、根本的に計画を変えた。1~2世帯が入れる家や低層のアパートで賄い、もっと低所得者に家を与えることができるような計画で、最初に計画された大きな公園は廃止し、使い勝手の良い小さな公園をところどころに配置する計画だ。ヨランダ・ガルシアのように、もとは都市計画の専門ではないが、自主的に勉強して都市計画家になっている人が多いのも、コミュニティプランの特徴だ。

#### ・アトランティック・ヤード計画

電車のヤードの上を人工地盤とし、3~16階建ての中・高層建築物を並べ、プロバスケットボールチームのホームグラウンドを作る計画をダ・フォレスト・コニー・ラダーグループという不動産会社が作ったが、それに地元住民が反対して、2007年に、折衷案ができた。元の計画は、ヤード上の建物により、ヤードの両側が分断されてしまう内容だったが、折衷案では、両側の結びつきを考え、オープンスペース

を設けてある。不動産会社にしてみれば、案がどんどん壊され、変化させられるという事態に見舞われた事例だ。

その他、コミュニティプランの事例としては、固形廃棄物処理場は、貧民層に設けられる事が多かったが、その環境における公正さや正義というものに改善や進歩がなかったが、2002年に全市でどの地域に固形廃棄物の処理場が計画されているかということについてコミュニティプランナーから疑義が出されているという事例がある。

また、都市交通においても、自転車及び歩行者プランとして、1975年に交通を車から代替のものに変えようというグループができ、1997年に、自転車マスタープランができています。

一般的に知られているのは、合理的総合的計画と言われるもので、農村から都市の風景計画だ。

現在までの都市美計画の変遷としては、オスマンのパリ計画が、下水道などの都市に必要な整備を求めたものとして、都市美運動の始まりだ。1909年のダニエル・ドーナムのシカゴ計画に影響が見られる。

それに対する代替案として、進歩的コミュニティプランニングが提唱できる。

・恒久的な住宅地としない。・計画の透明性を上げオープンにする。・排他的にしない。・一部だけでなく全体で計画する。・地方だけでなく、地域的に考える。・7世代後を考えて計画する。(7世代、というのは、ニューヨーク近くに元住んでいたイロコイ部族の定め)・人々の生活の質を上げる。・収容を目的としない。(広がることを否定しているわけではない)

#### ・コミュニティプランの今後の課題について

##### ①コミュニティプランに戦略を持たせる。

コミュニティの土地をいう観念を持つには、戦略的な手段が要る。誰が土地をコントロールするのか、誰が利益を得ているのか。都市計画の専門家は、目の前の事を考えるため、不動産会社など要望に応え、コミュニティの観点が欠けてくる。非営利団体は、企業からの配当もなく、土地からの利益もないので、公平に考えられる。

80のコミュニティ開発会社(CDCS)が現在あり、10000個の計画を作っている。転売や配当を禁止し、不動産の投機に流れないようにするために、社会的関係を構築している。

##### ②対立・矛盾・複雑さに対応する。

近代化から対立・矛盾・複雑さが生まれている。善悪などで生まれたわけではなく、コミュニティの違いから生まれている環境住宅や恒久的な住宅地などがあったが、近年、郊外型住宅では、低所得者が流れ込むなどして、以前の良い環境では住み続けられなくなっている。

#### ・連携について

1995年に都市計画家のネットワークとして、進歩的計画組織ができ、コミュニティプランナーの連携ができるよう

になった。メンバーとしては、専門家のほか、自主勉強で都市計画を身につけた者、学生で構成されている。

### 質疑応答

・2年前にニューヨークに訪れた時、ブルックリンがきれいになっているのにびっくりした。コミュニティプランの組織は公的？民間？>金融市場の都市の放棄が起きているため、コミュニティプランが重要視されている。コミュニティプランの組織は、専門家（APAなどが小グループで、隣人のために行なう）を中心としてキャンペーンを行い、コミュニティに基礎を置く。

・土地は民間所有か？>ニューヨークは、産業がなく、商品のみで動いている。郊外は低所得者の地区が出てきている。3世代同じ場所にいることはなかなかない。土地は、大体が公共（連邦政府、州、市）の物だ。30%の街路、10~15%の公園、病院や学校などの準公共なので、あと10%が投機の対象。不動産政府として、転売の事業で儲けている。最後に世界化が起きたのが不動産だ。しかし、「場」を分かんずくに売買するのは良くない。

・アーサーペリーのラドバーンで出来たニュージャージーのラビットタウンは顕在か？>近隣住区は学生が学ぶけど、実施はもうされていない。2000の自治体がそれぞれで考えている。大体、車社会が進展してしまい、歩いて生活する必要がなくなり、車を持っている人は、遠いところまで行く。シアトルの近隣住区を例に取ってみると、郊外に飲み込まれて見つからなくなっている。ラビットタウンも代わってきており、最初白人が多く住んでいたが、現在は低所得者の黒人を初め、色々な人が多く住み、差別により公共サービスが低下してきている。

・コミュニティプランニングをするためには何人必要か。>人数ではなく、プロセスが大事。500人集まっても低レベルなことがある。オープンで排他的でないことに気をつければ、5人でも十分。ビジョンをはっきりさせることにより、コミュニティを活性化し、確実に実行されるようにプランナーが助けを出し、組織していく。

どうすれば活動的にコミュニティプランが推進できるかというのは、やはり、自分がやりたいと思い、動かしていかなければならない。なぜやりたいのか。自分自身がやるのか。そこら辺を見つめて進める必要がある。

・ディベロッパーが参加するには？>高密度にする必要はないのではないのか。質は高密度に寄らないのでは。質には、通勤が楽、空気が良い、健康に良いというものがあると思う。一番空間的に貧乏な生活は何かを考えてみるといい。

アトランティック・ヤードは、街の繋がりがなくなるのを地域住民が反対した。メルローズの計画では、高密度を低密度の中層でも儲かるということを実証した。

・ワールドトレードセンターの跡地の開発はどうなっているのか。ダニエル・リベスキンドのホロコーストミュージアムのような建物になるのかと思っていたが。>9.11以降アイデアを募り、コミュニティプランが60案出てきた。し

かし、連邦と州が、専門家的にクローズトで選考し、バイダブランドベルという建築家が作った案になり、2002年春に発表されたが、商業ベースの土地利用で、9.11の記憶を認知させるものがなく、全部コミュニティが考える物と反対のプランだった。そのため、2002年の7月に5000人が集まり、別のアプローチを政府に求めた。政府は国際コンペに踏み切り、商業的プログラムで進め、建物の形、構成に進んだ。それは、公共がデザインの対象になったことを示す。ダニエルリベスキンドは市民の意見を統合したデザインを行なった。

ワールドトレードセンターのあとは裁判で、国の復興のために早く再建するのが愛国者として良いということだったが、ワールドトレードセンターで犠牲になったのは1/3が米国人ではなかったということを重視していない。また、ビジョンとして思いを入れようという意見がなかった。これも問題なのではないかと思う。 (文責：福馬晶子)



## ■ ひろしま風景づくりフォーラム・フォトコンテスト ■

日時：平成21年2月7日(土) 13:00~16:30  
 場所：広島市まちづくり市民交流プラザ5階会議室  
 主催：広島県建築士会広島支部  
 共催：日本都市計画学会 中国四国支部



広島県建築士会広島支部まちづくり委員会を中心としたひろしままちづくりフォーラム実行委員会では、「広島風景の記憶」をテーマとし、未来に伝えたい風景や被爆以前の風景、過去記憶を残していたり残したいと思える建築・土木の風景などで、広島市内の風景づくりに関して考えるきっかけとなるものを「ひろしま風景の記憶フォトコンテスト」として募集し、フォトコンテストの審査及びフォーラムを平成21年2月7日に行いました。

審査委員及びパネリストとして、審査委員長 広島県建築士会 錦織会長の元、建築士であるアトリエ トライアウトの細見恵氏のほか、ひろしま美術館主任学芸員の古谷可由氏、広島市立大学芸術学部映像教務員の記谷伸彦氏、APA 日本広告写真家協会正会員の村田剛志氏という建築士とは分野の違う方たちが集まっていたり、ひろしまの風景について、熱く語らっていただき、会場にご参加の皆さんを含めてひろしまの風景について考えました。



フォトコンテストの結果は以下のとおりになりました。

1 等	被爆建物と被爆電車	山本 隆太
2 等	雁木 (1)	石井 浩
3 等	シロツメクサの咲く頃	馬谷 錬治
3 等	雪の平和公園から原爆ドームを望む	中本 健治
3 等	ありがとう	花谷 英親
奨励賞	桜をくぐる可部線	安藤 友希
奨励賞	広島城	萱原 威
奨励賞	傷痕	岡田 英治
奨励賞	8月6日・灯籠流し・原爆ドーム	松岡 友夫
奨励賞	親子のポップラ	坪島 遊

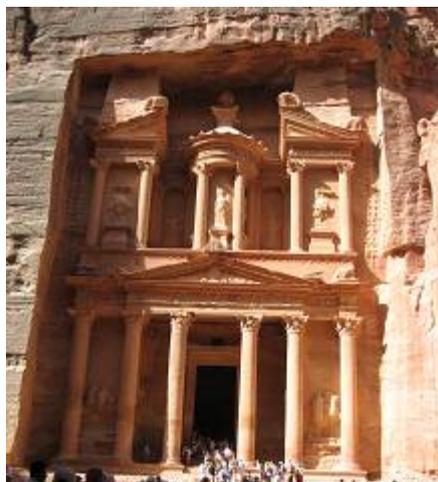
その後のフォーラムでは、各氏に発表をしていただき、その後意見の交換が行われました。

錦織会長は、戦後の写真で絶望の深淵から立ち上がった人間味あふれる風景や、地図だらけの情景、看板だらけの踏切や、家の前を道路後退した空地に花を植えてゆっくりできる場所を設けたケースなどを紹介され、問題提起をされました。アトリエ トライアウトの細見恵氏は、戦後の町並みと最近の町並みを比較して、広島町の町並みの変遷を話されました。広島市立大学芸術学部映像教務員の記谷伸彦氏が猿楽町の復元CGを紹介され、原爆前の広島ののどかな風景を紹介されました。APA 日本広告写真家協会正会員の村田剛志氏は、商業写真を撮影する中で、1瞬の風景に賭けて何時間もかけるという風景の移ろいについて話されました。ひろしま美術館主任学芸員 古谷可由氏は、美術館は美術品の墓場なのではないかという問いかけから、墓場ではいけないだろう、広島風景を元に戻せばいいという話ではなく、残し方が問題になるのではないかと、ということについて、ゴッホのドゥビーの庭で絵の具の下から猫が出てきた例をあげて、風景の残し方について話されました。

総評として、風景というものは、人間が介在し、記憶の中に残るものであるのではという話になり、どのようにということについて、また次回もこのフォーラムの続きを行って話していきたいという話になりました。

(文責：福馬晶子)





(バラ色に耀く宝物殿、エル・ハズネ)

エル・ハズネの北にペトラの遺構群が広がっている。ここから北に延びるファサード通りを歩いていくとローマ円形劇場にぶつかる。この付近に、岩をくり抜いた建物が多く見られる。印象的なのは王家の墓と呼ばれる巨大な岩窟墓群で、劇場の南側に4つ並んでいる。最大のものは、一番東側(下記写真の左側)で3階建てのローマ帝政期宮殿建築を模倣したものであり、コリント式の柱を使っている。



(左から宮殿式、コリント式、シルク式、壺型の墓群)

さらに足を進めると、ペトラ遺跡の真ん中あたりに位置する列柱通りに出る。この列柱通りは幅約6m、長さ約150mで、石畳は昔のままであるが、円柱はほとんど残っていない。この通りを都市軸として、道の両側に神殿、宮殿、諸官庁、商店街、市場、浴場などがあったが、363年に続く551年の大地震でほとんど崩壊してしまった。現在、ここには大寺院のみが修復されており、列柱通りの突き当りには、比較的保存状態のよい凱旋門が残っている。



(円柱の根元部分が残っている列柱通りと凱旋門)

凱旋門を出てさらに北に進むとフォーラム(広場)に出る。そこから北東方向に山道を1時間ほど登ると、エド・ディル(修道院跡)に着く。高さ45m、幅50mにわたって彫り抜かれ、エル・ハズネよりも大きい。1世紀中頃に建てられたナバタイ人の神殿で、ペトラ第2の観光ポイントである。ディルは修道院という意味で、ローマに併合された後、この辺りにキリスト教の修道士が住んでいたことからこの名前が付いている。



(山中の岩山を彫り抜いて造られた修道院、エド・ディル)

## 2. パルミラ

パルミラはシリアの首都ダマスカスの北東約230km、砂漠の中にある隊商都市である。ここは、アラビア半島やメソポタミアと地中海とを結ぶルート上にあり、古くから東西交易の要衝として栄えた。特に紀元前1世紀末から紀元後3世紀にかけては、中国とヨーロッパを結ぶシルクロードの隊商都市として栄華した。この間、次第に巨大化してきたローマ帝国の支配下に入ったが、比較的自由的な自治権を保持し、2世紀ペトラがローマに併合された後、ペトラの通商権を譲り受けた。

この頃がパルミラの最盛期で、貴族商人が支配し、ローマの影響を受けた多くの建造物が増改築された。しかし、3世紀後半ローマが弱体化した機会を捉えて、ローマから独立しようとしたが失敗し、274年に滅ぼされてしまった。ローマ時代後、いろいろな王朝の支配下に入ったが、かつての栄華を取り戻すことはなかった。

遺跡を実際に訪れてみて、広大な大地にそびえ立つ列柱群や神殿跡を目のあたりにすると、かつての輝かしい栄華を実感させられてしまう。また、遺跡の北西にそびえるアラブ城に登ると、ナツメヤシの林の向こう、はるかかなたまで続く砂漠に、東西交易で繁栄したパルミラの姿が思い浮かぶ。



(アラブ城から見たパルミラ遺跡の全景とナツメヤシ林)

観光の出発点は、城壁で囲まれた遺構群の中ほどにある記念門である。そこからメイン・ストリートである幅 11m の列柱道路が西に向かって 1.2km ほど伸びている。路面はラクダの足を守るために砂地のままで、舗装されていない。当時は高さ 9.5m、直径 95cm の石柱が 750 本も道の両側に並び、それに平行して商店街が続いていた。



(ローマ最高の装飾技法が用いられた記念門)

コリント式の列柱の高いところに、小さな台座が道路上に突き出ている。ここに、かつてパルミラに貢献のあった人々の彫像が安置されていた。歩行者の目線より高くなっているのは、ラクダに乗って入ってきた隊商の目の高さにあわせたからである。隊商はこれらの像に迎えられて、商品取引の場となるアゴラ（広場）に向かったのである。



(列柱道路の円柱に設置された台座)

列柱の外側は歩道として使われおり、ラクダと歩行者を分離した形態になっている。その付近に昔の水洗トイレ、水道管が当時のまま残っている。当時上下水道が整備されていたことが伺える。浴場・サウナの跡や円形劇場も道路の両側に残っている。円形劇場は比較的保存状態がよく、毎年パルミラ・フェスティバルが開かれている。



(歩道に放置された当時の水道管)

道路をさらに進むと大きな交差点があり、その真ん中に 4 本の柱が 4 組ある四面門がある。修復されたそれぞれ 4 本の円柱の中には、彫像が置かれていた。この巨大な門は夕日を浴びると、赤みが増し、この上もなく美しい。道路の 4 方向からその姿が見え、直線的な道路空間の中で、重要な都市景観を構成している。



(交差道路の 4 方向から視点の中心となる四面門)

パルミラ遺跡で最後に訪れたのが、記念門の南側にそびえ立つ巨大なベル神殿である。この神殿は、紀元 1~2 世紀半ばに建造されたもので、神殿の中に入ると、列柱で囲まれた約 200m 四方の広い敷地の中央に、本殿や犠牲祭壇がある。犠牲祭壇は本殿の正面前にあり、神に捧げられる動物が犠牲にされた。本殿は、神像安置所があり、かつては主神ベル（豊穡の神）が中央で、左右に太陽神ヤヒボール、月神アグリボールを従えた 3 神像が安置されていた。



(正面から見たベル神殿の巨大な本殿)

### 3. ジェラッシュ

ジェラッシュはヨルダンの北部、首都アンマンの北約 50km の所にある。一般にあまり知られていないが、ペトラ、パルミラ以上にローマ風の街並みが多く残っている。ジェラッシュが歴史に現れるようになったのは紀元前 4 世紀前半の頃からであるが、紀元前 64 年にローマの植民地に吸収された。紀元 50~60 年頃から、ローマ帝国の繁栄に伴って、その支配下での交易で潤い、大掛かりな都市計画で典型的な古代ローマ都市に生まれ変わった。

106 年にヨルダンの南部がローマに併合され、これによってアカバやペトラ、そして東方の都市とも交易路がつながるようになり、より多くの富をもたらすことになった。現在残る遺構の多くは、この頃のものである。3 世紀の初めには、繁栄の絶頂期を迎えたが、海上輸送の発達やパルミラの滅亡などにより、その繁栄に陰りが見え始めた。その後 749 年に大地震が起こり、廃墟になってしまった。

ジェラッシュ遺跡の見学は、遺跡の南端の小さな凱旋門から始まる。これは 129 年、時のローマ皇帝ハドリアヌスが訪れたのを記念して建てられたものである。



(ハドリアヌス帝を称えた重厚な凱旋門)

凱旋門を奥に進むと、競馬・戦車競技場がある。245m×52m の競技場では、戦闘用馬車の競争などが行われていた。そこから 300m ほど北に進むと、遺跡の南門に出る。ローマ時代には、ここから幅 3m、全長 3.5 キロほどの城壁が街を取り囲んでいた。門を入った左側にゼウス神殿の跡があり、その隣に南劇場がある。3,000 人を収容するこの劇場はほぼ完全な状態で保存されている。音響効果が素晴らしく、毎年ジェラッシュ・フェスティバルが開かれている。



(ほぼ完全な原形に修復された南劇場の舞台正面)

南劇場の上部から 80×90m の楕円形の広場、フォーラムが見える。紀元前 1 世紀に建てられ、切り石で舗装されていた。石の下には町の下水システムが集中していた。当時は社会生活の中心で、市場か宗教的儀式に使用されていたようである。



(64 本のイオニア式円柱で囲まれたフォーラム)

フォーラムの北側にあるアゴラは、古代ギリシャの町には必ずあったと言われる集会所で、ここでは市場として使われていた。円柱で丸く囲まれた美しい広場である。

フォーラム付近から北門まで続くおよそ 800m のメイン・ストリートは、道の両側に修復された円柱が立ち並ぶ列柱通りである。砂漠の交易で巨利を得た商人達が、旅の安全を祈って円柱を寄進した。かつては両側にそれぞれ 260 本の円柱が、計 520 本並んでいた。石畳道路の下には平行して地下水路が走っている。列柱道路は車道を列柱によって歩道と区別し、現在でも轍の跡が見られる。この修景道路を軸にして、道路は碁盤の目のように整えられた。



(隊商都市独特の景観を創り出す列柱通り)

この通りの中ほどで、目立つ大きな建物がアルテミス神殿である。女神アルテミスに捧げられた神殿の前には、12 本の巨大なコリント式円柱がそびえ立っている。柱頭にはコリント式円柱の特徴であるアカンサスの葉の細かい彫刻が施されている。柱の底は丸く削られ、地震で柱が揺れてもエネルギーを吸収する耐震構造になっている。



(柱頭の彫刻が美しい円柱がそそり立つアルテミス神殿)

アルテミス神殿から列柱通りを渡って東側にあるのが西浴場である。今では浴場の面影はないが、もう一つの東浴場とともに人々がよく集まる町の中心部にあり、憩い・社交の場としての賑わいぶりが想像できる。

#### 4. おわりに

今回の旅行は古代の遺跡めぐりが中心だったが、これ以外に預言者モーゼが死の直前に登ったと伝えられるネボ山、ビザンチン帝国時代の繊細なモザイク地図の残る聖ジョージ教会、十字軍の城砦クラック・デ・シュバリエなど、古代・中世のキリスト教関連地にも立ち寄ることができた。

移動は全てバスだったが、道路がよく整備されていたので快適だった。途中、塩分濃度 25% 以上という死海で遊泳を楽しむことができた。このような旅行を通じてイスラム文化にも触れることができ、十分満足できるものであった。

参考書: ヨルダン シリア レバノン、ダイヤモンド社

■**会員紹介**■

●樋口 忠彦 (ひぐち ただひこ)

広島工業大学環境学部地域環境学科教授



■プロフィール

出身地は、埼玉県羽生市。関東平野のほぼ中心に位置します。自然主義文学の代表作品といわれる田山花袋の『田舎教師』の舞台になっています。明治42年に花袋が描いた田舎の情景は、いまだ残っています。関東平野は広大です。

東大の土木で博士の学位を取得。その学位論文を『景観の構造』として1975年に出版。山梨大学助教授(環境整備工学科)のときに『日本の景観』(春秋社、後に、ちくま学芸文庫、1981年)を執筆。新潟大学教授(建築学科)のときに書いたのが『郊外の風景』(教育出版、2000年)。三つとも絶版になることなく、いまだに発行されています。その他数多くの共著本を書きましたが、これは省略します。

4年間、京都大学大学院(工学研究科都市環境工学専攻)の教授をつとめて、一昨年前に広島工業大学(環境学部地域環境学科・環境デザイン学科)へ。

■関心事

埼玉、東京、山梨、新潟、京都と、さまざまな地域の景色に馴染んできましたが、いよいよ瀬戸内海です

二年間の印象ですが、瀬戸内海地域の特徴は、平野が乏しく、山と海が近いということです。このため、そこを流れるいずれの川も、谷川や中流河川の様相です。このため、いずこも山気(嵐気)と川気と海気とが、密度高く混じり合っています。

もう一つの特徴は、温暖な地ということです。

これだけの資源に恵まれているのに、どうして一流の観光・リゾート地が育たなかったのでしょうか。温泉地が少ないからでしょうか。

日本の景観研究は、観光計画を母胎にして生まれました。観光資源研究が、景観研究に特化していったのです。東工大の鈴木忠義研での助手時代には、私は観光計画を立案していました。

そんな青春時代を思い出しながら、瀬戸内海地域の景観価値を、観光資源として見直してみたらと思っています。

●岐美 宗 (みちよし つかさ)

広島商船高等専門学校教授 流通情報工学科 博士(工学)



■京都そして千葉から広島へ

京都生まれです。大徳寺のある紫野で育ちました。千葉県の習志野台地にある日本大学理工学部交通土木工学科(現 社会交通工学科)に入学後、大学院修士課程を修了し日本大学理工学部助手・東京商船大学商船学部助手を経て、2001年に妻子を千葉に残し広島に単身赴任しました。大学の恩師は、高田邦道博士(日本大学)と苦瀬博仁博士(東京海洋大学)です。交通および物流工学の権威です。いま振り返ると、両先生からご指導を頂きました現場第一主義の教えを、15~22歳の若い学生諸君と一緒に自ら実践しています。さて、広島商船高等専門学校は全国 55 国立高専のひとつで、多島美が絶景の中瀬戸の大崎上島にあり、海員学校として設立され 110 年の歴史があります。船舶運航技術者やメカトロニクスおよびロジスティクス・システム技術者を育成しています。

■まちづくり実践教育

これまでに学生と多くのまちづくりを実践してきました。いくつかを紹介します。『空家の再生で流通実験店舗と寺子屋学習・交流塾の開設』です。これは「学生自らがビジネスを成立しながらおこなうまちづくり」です。舞台は対岸の竹原市重要伝統的建造物群保存地区で、江戸期に塩田で栄えた町並みが今でも残ります。空家・高齢化率が高く、官民協働によるコミュニティ再生は急務の課題です。ちょうど2004年度に、竹原市より協働のまちづくりのあり方を審議せよと会長を委嘱されたこともあり、学生による手づくり地域貢献モデル事業を試行しました。特徴は流通実験店舗の利益とひと(学生)と技術によって寺子屋学習・交流塾で地域教育に還元するコミュニティ・ビジネスの試行です。2005年5月に本校の竹原サテライト・オフィスとして開設しました。ボランティア活動とは異なり地域が抱える課題を継続的なビジネスでの解消を成果とし、地域社会の意義や意味を追求しています。学生は店舗でマーチャンダイジングと塾で地域住民との交流を重ね、PBLによるスキルアップとPDCAによる自律サイクルを経験しています。この実践教育は「ひとづくり」のヒントを与えてくれます。座学と現場の接着はプロセスのデザイン力を養い、失敗・成功



